

阿彌陀經

釈尊の呼びかけを聞く

A M I D A K Y O N Y U M O N

入門

一楽真

## 本書について

本書は、当派が発行する『同朋新聞』（二〇一八年三月号～二〇一九年十月号）に連載された一樂真氏の「阿弥陀経に聞く」（全二十回）に加筆・修正をいただき、書籍化したものです。

特に『阿弥陀経』は、真宗門徒にとって親しみのあるお経です。本書は、その内容を学び、あじわうための入門書となることを願い発行しました。

はじめにお経全文の書き下しにふれていただき、そして、経文にこめられた仏意（おこころ）を尋ねていく内容となっています。

また、お経の区切りごとに一樂氏による意訳を掲載しています。

是非、本書をくり返しお読みいただくことをとおして、お盆のお勤めやご法事の場合等で読まれている『阿弥陀経』にあらためてふれていただき、釈尊の教えに出遇っていただけることを願っています。

『阿弥陀経入門』 目次

『仏説阿弥陀経』 書き下し文 ————— vii

はじめに ————— 1

一 浄土三部経について ————— 7

二 阿弥陀経という經典 — 無問自説経 ————— 13

三 阿弥陀経の会座<sup>えざ</sup> (一) — 祇園精舎<sup>ぎわんしょうじゃ</sup> ————— 19

四 阿弥陀経の会座 (二) — 集った人びと ————— 25

五 今<sup>こんげんざい</sup>現在説法<sup>せっぽう</sup> ————— 31

六 極楽の莊嚴 (一) — 七宝の世界<sup>しっぽう</sup> ————— 37

七 極楽の莊嚴 (二) — 極楽に生まれた者の生活 ————— 43

八 極楽の莊嚴 (三) — 無三惡趣<sup>むさんあくしゆ</sup>の世界 ————— 49

九 阿弥陀の名 ————— 57

十 極楽に生まれる者の功德 ————— 63

十一	執持名号 <small>しゅうじのみょうごう</small>	69
十二	多善根・多福德 <small>たぜんこん たふくとく</small>	75
十三	恒沙の諸仏の勧め <small>ごうじや しよぶつ</small>	81
十四	諸仏の護念 <small>しよぶつ ごねん</small>	91
十五	難信の法 <small>なんしん ぽう</small>	97
十六	世間甚難信 <small>せけんじんなんしん</small> (一)	103
十七	世間甚難信 <small>せけんじんなんしん</small> (二)	109
十八	流通の願 <small>るづう がん</small>	115
十九	宗祖の受けとめ	121
	あとがき	127

はじめに

それでは、みなさんとご一緒に『阿弥陀経』のころを尋ねてまいりたいと思います。『阿弥陀経』は、詳しくは『仏説阿弥陀経』と言い、『仏説無量寿経』(大無量寿経、大経)、『仏説観無量寿経』(観経)とあわせて「浄土三部経」と呼ばれます。また、「大経」に対して『阿弥陀経』は「小経」とも呼ばれます。阿弥陀仏とその国である極楽(浄土)について説かれた経典です。

日頃のお勤めでは、親鸞聖人がお作りになられた「正信偈」や「和讃」を読むことが多いと思います。「正信偈」はお聖教であります。お経とは言いません。お経は、どこまでも釈尊(お釈迦さま、仏陀とも言います)が説かれた教えを指し、仏の説法という意味で、「仏説」と呼ばれます。

まずは、お経を読むということについて確かめておきたいことがあります。お経は仏説だと言いましたが、仏とは「覚者」という意味です。苦悩を抱え、お互いに傷つけ合うような人間の生き方の根っこに、本当のことを知らない無明があることに目覚めた方です。言い換えれば、どうすれば、安心して人生を尽くしていけるのかということに目覚められたのです。釈尊は、苦しみ傷つけ合う人間の生き方をご覧になり、その痛ましさを超える道を説かれました。それが、たくさんのお経となって伝えられているのです。

その意味では、お経は釈尊からのメッセージと言えます。痛ましい生き方に気づいてほしいという呼びかけの言葉です。

釈尊は目の前の相手の状態を見て、教えを説かれました。思いあがっている人には厳しい言葉で、落ち込んでいる人には優しい言葉で、相手の抱えている問題に応答しながら説法されました。これを「対機説法」と言います。病気に応じて薬を与えるという意味で、「応病与薬」とも言われます。

そうして人間の問題の数だけ、悩みの種類に応じて説かれたお経は、「八万四千」という数で表現されます。ただ、気をつけなければいけないのは、釈尊の言いたいことがたくさんあったという話ではありません。釈



尊は、どの人にも苦しみ傷つけ合う生き方を超えてほしいという、ただ一つの願いに立っておられたのです。ですから、その願いを聞くことがなければ、どれほど多くのお経を読んだとしても、また書き写したり憶えたりしたとしても、釈尊の教えに出遇ったことにはならないのです。

実際、今から二千五百年前、釈尊に会うことができ、直接に説法を聞くことができた人の中にも、釈尊に背いたり、釈尊の元を去っていった人もありました。それは、釈尊の本来に伝えたい願いに出遇えなかったからです。その意味では、教えに遇うということは、なかなか難しいことであると言わなければなりません。それは仏の教えが難しいという意味ではなく、仏の呼びかけを聞くことができない私たちの側の問題です。痛ましい生き方をしていると教えられても、自分は間違っていないと思いついて入っている間は、教えの言葉が届かないからです。

お経を読むには、文字になっていない言葉を読むことから始めるしかありません。私たちにとっては、中国で漢字に翻訳されたものが一番身近です。ただ、漢文をすらすらと読むことには困難がともないます。それゆえ、漢文に慣れて、仏教用語の意味を少しでも知ると、お経を学んだような気になってしまいがちです。しかし、本当にお経を読むとは、文字に託された仏の願いを聞くことです。言葉をとおして、その言葉が気づかせようとするに出遇わなければなりません。

『阿弥陀経』が何を呼びかけているのか。ご一緒に耳を澄ませて尋ねていききたいと思います。

一 浄土三部経について



『仏説阿弥陀経』は、『仏説無量寿経』（大経）、『仏説観無量寿経』（観経）とあわせて「浄土三部経」と呼ばれます。「浄土三部経」という呼称は、親鸞聖人の師である法然上人が『選択本願念仏集』（選択集）という著書の中で述べられたのが最初です。この三つの経典が正しく往生浄土を明らかにする教えであることを示されたのです。法然上人はあらゆる経典を集めた「一切経」を五回通読したと伝えられるほど、経典を読みぬかれた方です。六千部近くある「一切経」を四十三歳になるまで読み続けたのです。それは、自分が本当に救われていく道を求め続けたからでした。その中で法然上人は、中国の僧である善導大師の言葉をとおして、阿弥陀仏の浄土を説く教えこそが、誰もが迷いを超えることのできる教えだと確信したのです。

はじめから三つの経典がセットになってまとまっているならば、注目するのは容易かもしれません。しかし、膨大な経典の中から、この三つを取り上げて依るべき経典であると示すことは簡単ではありません。それは、釈尊が教えを説かれた意図、すなわち仏意を尋ねていくお仕事でした。ですから、他の経典と比べて、こちらの方が良いと決めるような話ではないのです。それならば、経典を品定めすることに外なりません。迷っている人間が、覚った仏の説法を評価するなど、越権行為はなほだしいと言わなければなりません。

釈尊が涅槃に入られる時（亡くなられる時）に説かれたものに、「義に依りて、語に依らざれ」という教えがあります。説法は主に言葉によってなされますが、説いた言葉に執われてはならないことを戒めています。大切なのは、その言葉が何を伝えようとしているのか、その言葉の意味するところに依らなければならぬということです。また、釈尊が言ったことだけを仏説と考えるならば、釈尊が言っていない事柄はどうでも良いともなりかねません。

さまざまに説かれた教えを貫いている願いは何か。異なって見える説き方を、釈尊はなぜしなければならなかったのか。その仏意を尋ねることを